

むつ中間貯蔵施設：使用済核燃料搬入へ安全協定、覚書が締結されました

～今月下旬にも「使用前検査用・使用済核燃料装填キャスク」が搬入される見込みとなりました～

ご承知のように8月9日、青森市内で宮下知事、山本市長と高橋 RFS 社社長の間での安全協定、さらに前者に親会社 2 社を加えた覚書が取り交わされました。このことにより、月内にも使用前検査用の使用済核燃料装填キャスクがむつ施設へ搬入されることが現実味を帯びてきました。検査用キャスクとはいうものの、本物の使用済核燃料 12 トンが装填されたものです。

協定締結にあたり、山本市長は「説明会で出された市民の不安は覚書締結で払拭される」として県知事へむつ市として協定締結へ異議のない意向を伝えていきます。しかし、説明会で出された多くの疑問や懸念には何一つ答えるどころか、説明会の内容や市としての見解は全く示されないままであり、市民を置き去りにした暴挙と言わざるを得ません。

安全協定に署名する（右から）山本市長、宮下知事、RFS、東電、原電の各社長＝9日、青森市



宮下知事が協定締結に至ったとするポイント

青森県知事の安全協定締結への説明資料より

覚 書

- ①東京電力ホールディングス株式会社及び日本原子力発電株式会社は、リサイクル燃料備蓄センターに係る使用済燃料の輸送に関し、責任をもって必要かつ適切な措置を講ずるものとする
- ②東京電力ホールディングス株式会社及び日本原子力発電株式会社は、リサイクル燃料貯蔵株式会社が「リサイクル燃料備蓄センター周辺地域の安全確保及び環境保全に関する協定書」における各項目を遵守するよう、責任をもって指導、助言するものとする
- ③使用済燃料中間貯蔵事業の確実な実施が著しく困難となった場合には、青森県及びむつ市並びにリサイクル燃料貯蔵株式会社、東京電力ホールディングス株式会社及び日本原子力発電株式会社が協議の上、リサイクル燃料貯蔵株式会社は、使用済燃料の施設外への搬出を含め、速やかに必要かつ適切な措置を講ずるものとする

経済産業大臣への確認（一部）

【中間貯蔵事業の位置付け、搬出先の明確化】

- ・ 中間貯蔵施設の意義や重要性について、次期エネルギー基本計画において、明確に位置付ける。使用済燃料の搬出先について、具本化を図るべく検討を進める
- ・ 具体的には、安全性の確保を大前提として、六ヶ所再処理工場の安定的な長期利用、六ヶ所再処理工場での処理を想定した場合の、課題と対応策検討

【このタイミングで事業開始すること】

- ・ 核燃料サイクルの確立には、その環を構成するすべての関係施設について、着実な稼働を進める必要があり、むつ中間貯蔵施設の事業開始は極めて重要で安全協定を締結を進めていただきたい

むつ市長の意向

- ・ 市民から意見のあった使用済燃料の確実な搬出、国民全体への周知について、事業者及び国のトップの認識を確認できた
- ・ 特に事業者から文書の取り交わしについて、合意を得たこと、経済産業大臣から搬出先について、次期エネルギー基本計画で具体化を図るなど、重要な発言があったと認識
- ・ 安全協定を締結できる環境が整ったものと受け止めており、県とともに締結に進みたい

覚書と言い、経産大臣との口頭確認と言い、何一つ具体的なものがありません！

8月9日、協定締結当日 青森県庁を訪れ、搬入反対署名簿を提出

協定締結当日、「核のゴミから未来を守る県民の会（古村一雄共同代表）」と「使用済価格燃料搬入反対現地実行委員会（中嶋寿樹代表）」は県庁を訪れ安全協定締結見直しを求める抗議交渉を行いました。

また、並行して「核の中間貯蔵施設はいらない！下北の会（野坂庸子代表）」と「原子力規制を監視する市民の会（東京：阪上武代表）」がむつ施設搬入反対署名簿（インターネット署名/13,195 筆、書面署名/928 筆）を県原子力立地対策課課長代理へ提出しました。なお、署名は現在も受付中で今月下旬にはむつ市へも提出を予定しています。



署名簿を提出する栗橋事務局長

むつ市内でも街宣行動を実施！

8月9日午後4時過ぎのホテル青森で開催された協定書調印式に合わせて、青森市とむつ市でも反対行動が実施されました。

青森市では調印式会場前で「核のゴミから未来を守る県民の会」メンバー30名がシュプレヒコールを響かせました。

また、むつ市内でも同時刻に合わせてマエダ本店前に現地実行委員会メンバー15名が集まり、野坂副代表らが6名が抗議のスピーチを行いました。スピーチでは特に山本市長が県・市民説明会の総括や分析をせず、しかも事前に表明していた市民への周知もないまま、宮下知事に協定締結容認を報告、このことが知事の最終判断に至ったことへの不満が示されました。



中間貯蔵 安全協定締結 市民団体が抗議集会

青森・むつ

使用済み核燃料中間貯蔵施設（むつ市）の安全協定が締結された9日、中間貯蔵事業に反対する市民団体は青森市とむつ市で抗議集会を開催。原発の使用済み核燃料を再処理するまで最

長50年保管する同施設について、「保管後の搬出先が決まらず、核燃料の最終処分地になる」などと懸念を訴えた。【本記1面】

同団体は宮下宗一郎知事宛てに公開質問状も提出。「（永久貯蔵の）懸念が払拭され、大きく前進したと述べた具体的根拠は」など25問の回答を要請した。

「原子力規制を監視する市民の会」「核の中間貯蔵施設はいらない！下北の会」は、協定締結や核燃料搬入に反対する署名計約1万4千筆（インターネット上含む）を収集。県庁で「むつ中間貯蔵が核のゴミ捨て場となる可能性は高く、だまし討ちのようなやり方で搬入を進めるべきではない」と訴え、県担当者に手渡した。

むつ市の市民団体「使用済核燃料搬入反対現地実行委員会」が同市で行った集会には約15人が参加。実行委メンバーと市議の計6人がマイクを握り、「説明会の総括もなく、むつ市長が何を根拠に『締結の条件が整った』と言ったのか理解できない」「安全協定に判を押すのは事業者と自治体だけ。国策ではない一つの会社の事業に、国が最後まで責任を持つのか心配だ」と批判した。



抗議スピーチを行う野坂副代表

今年も浮島丸追悼集会在開催されました

8月22日、31回目となる「浮島丸出港追悼集会」がむつ市中央公民館駐車場で開催されました。

1945年8月22日、数千人もの朝鮮人を乗せて釜山港へ向けて大湊旧菊池棧橋を出港した「浮島丸（日本海軍特設運送艦/乗組員255名/4,730総トン）が翌々日24日に京都府舞鶴沖で爆沈し多数の犠牲者が出たことを追悼する集会です。毎年、当市と爆沈地の舞鶴市でそれぞれ開催されています。

今年は、今まで政府が存在しないとした乗船者名簿の一部の存在が明らかになるなど事件解明の新たな動きもあったこともあり、県外からこの問題を調査研究する大学教授などの参加もありました。

午後1時30分過ぎからの追悼集会では参加者が献花し、湾内へ投下しました。その後、会場を公民館会議室に移動し、ビデオ学習会を行い、全体で当時の朝鮮人労働者の実態を学び合いました。

悲劇 次世代に語り継ぐ

大湊湾に向かって冥福を祈る参列者



出港地で追悼集会、冥福祈る

集会は市民団体「浮島丸下北の会」が主催し、今年で31回目。参列者は黙とうをささげた後、大湊湾に向かって花を手向け、手を合わせた。

村上準一会長は「まだにさまざまな疑問が解決されていない事件。政府に加害責任があることを訴え、真相究明や遺骨返還を前進させ、次世代につないでいきたい」と述べた。（佐藤航）

事件を巡っては今年5月、ジャーナリストの情報公開請求に対し、政府がこれまで存在しなかった乗船者が記された名簿を初めて開示するなど、明らかになっていない部分も多い。

集会は市民団体「浮島丸下北の会」が主催し、今年で31回目。参列者は黙とうをささげた後、大湊湾に向かって花を手向け、手を合わせた。

浮島丸は1945年8月22日夜、朝鮮人ら約3,700人を乗せて韓国・釜山へ向けて出港し、24日に舞鶴湾内で爆沈した。政府によると日本人乗組員25人を含む、計549人が犠牲になったとされる。

太平洋戦争終結直後、下北地域などで強制労働させられていた朝鮮人徴用工と家族らを乗せてむつ市の大湊港を出港し、京都・舞鶴湾で突如沈没した。輸送艦「浮島丸」の追悼集会在22日、出港地に当たる市中央公民館駐車場で開かれた。参列した市民ら約20人が犠牲者の冥福を祈り、歴史の継承へ決意を新たにした。

【18ページに関連記事】

朝鮮人徴用工ら500人超犠牲 浮島丸沈没

【なんと謎の多い事件が、この街であったことをあらためて考えてみませんか？】

- なぜ、この北の地にたくさんの朝鮮の人々がいたのか
- なぜ、終戦直後に大慌てで正確な乗船者数も把握しないまま出港しなければならなかったのか
- なぜ、目的地の釜山港に向かわず、舞鶴港に向かったのか
- なぜ、沈没したのか、陰謀説もあるなか、本当に触雷なのか
- なぜ、沈没のニュースがすぐに報道されなかったのか（9月に韓国の報道で初めて明るみに出た）
- なぜ、沈没したまま長期間にわたり放置されたのか（船体引き上げ作業開始は5年後から、しかも作業目的は鉄屑の回収）



ご存じでしたか？ 模擬原爆って

原爆といえば、広島・長崎が思い浮かびますが、その裏側にはこうした事実もありました。広島・長崎が人類史上初の核攻撃を受けた日から、今年で 79 年。

原子爆弾が投下された日は日本人なら誰もが知っているが、その約 2 週間前から、米軍が 5 トン爆弾を使って原爆を投下する訓練を日本上空で行っていたことを知る人は、意外に少ないのではないのでしょうか。

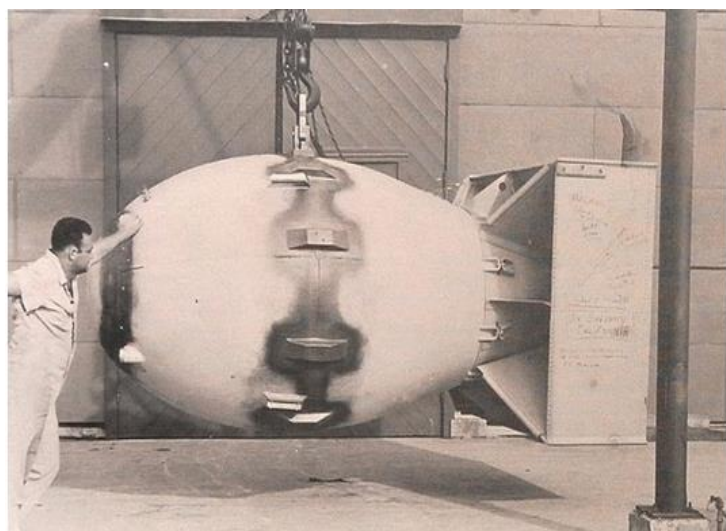
原爆の実戦での使用に備えて、原爆投下に専念する部隊が新たにつくられ、アメリカ国内の砂漠などでくり返し投下訓練が行われました。1945 年(昭和 20 年)に部隊はマリアナ諸島のテニアン島へ移動し、日本の地理に慣れ、目標へ確実に投下するため日本の都市に原爆の模擬爆弾を投下しました。弾体が橙黄色に塗装されていたことから「パンプキン」との通称名で呼ばれています。

投下の目標とされたのは原爆投下候補地だった京都市、広島市、新潟市、小倉市の各都市を 4 つのエリアに分けた周辺都市にあった軍需・民間の大規模工場・鉄道操車場等でした。(広島市エリアならば宇部市、

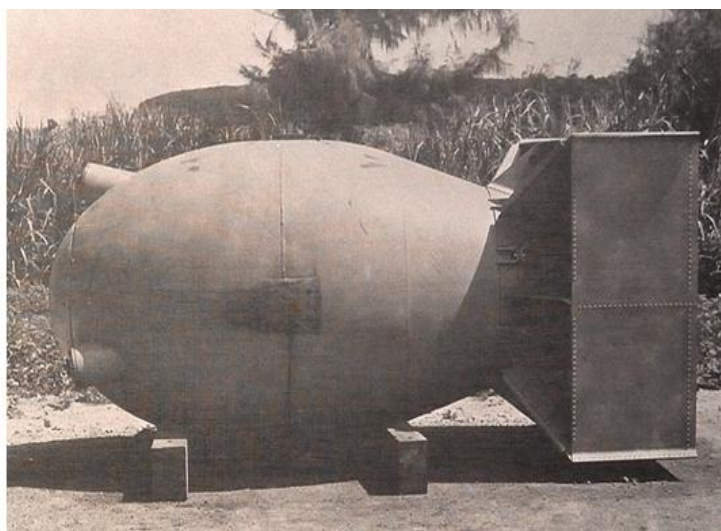
新居浜市など、新潟市エリアならば富山市、長岡市など)。しかし、投下は爆撃手の目視によると厳命されており、天候などの制約があるため、必ずしも目標地点に投下された訳ではなかったとされています。

アメリカ軍の資料によれば、指定された目標に投下できない場合には臨機目標としてどの都市でもいいので町の真ん中に落とすようにという指示があったとされています。そのため、7 月 26 日の訓練では天候悪化により富山の軍需工場への爆撃に失敗しその帰りに島田市(島田空襲)、焼津市、静岡市、名古屋市、大阪市など軍需工場とまったく関係ないところにまで投下されたという例もありました。

1945 年 7 月 20 日、新潟エリアである富山市・長岡市・福島市・東京都練馬区などへ計 10 発投下されたのを皮切りに 18 都府県 30 都市に 49 発(うち 1 発は任務放棄し爆弾は海上投棄)が投下されました。全体で死者 400 名・負傷者 1,300 名を超す被害が記録されています。そして今なお、模擬原爆 3 発分の詳しい着弾地点が分からないままです。



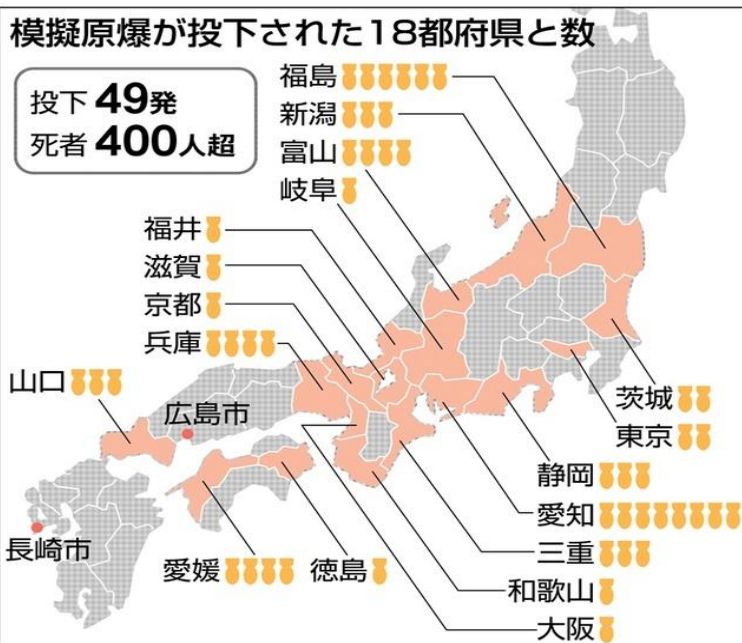
長崎に投下された原爆「ファットマン」



模擬原爆として使われた「パンプキン」



《上記写真のような模擬原爆の実物大模型は滋賀県大津市歴史博物館や新潟県長岡市戦災資料館に展示されています》



平成の大合併から、はや 19 年 少子高齢化社会の宿命が小規模集落に大きな影が……

合併特例法の改正に伴い 1999 年から始まり 2010 年 3 月まで続いた市町村合併。この間、全国の市町村数は 3,232 から 1,724 に減りました。当むつ市も 2005 年の合併から 20 年を迎えようとしています。

この間、全国でも「痛み先送り」のツケが顕在化しています。そのメリットが具現化する以前に国の優遇

措置が終わり、あらたな地域政策などの見直しや再検討が相次いでいる状況です。こうした課題は今後、より深刻に地域に影を落とし続けることになります。

今回の脇野沢地区の公共施設再編や観光事業の一部撤退などもその表れと言えます。

むつ市脇野沢の公共施設再編案



新流通センターの機能については、ホタテ耳づりなど体験機会の提供、テント泊や子どもが遊べるスペース、鮮魚販売、食堂などさまざまな希望が上がった。

市はワークショップで出た意見を精査した上で、9月にも今後のビジョンを住民に示す。

2019 年に日本弁護士連合会（日弁連）の調査では合併を選択した町村が、選択しなかった同規模の町村より人口減少率が高い実態がありました。その背景には合併によって役場の縮小など雇用機会の減少などが大きな要因であると分析しています。

日弁連調査合併した町村の方が人口減少傾向

「鰯の里」など廃止／「流通センター」建て替え

脇野沢の公共施設再編

脇野沢地区の人口は、旧脇野沢村時代の 1995 年は 3019 人だったが、むつ市などと合併した 2005 年は 2280 人（ともに国勢調査）、今年 6 月 1 日時点では 1227 人（住民基本台帳）まで減少した。合併時に示した 25 年時点の将来推計人口 1747 人を約 500 人下回っている。高齢化率も約 60% と高い。さらに村時代に建設し、築 30 年を超えた公共施設が多い。市は経営資源を集中投資するため「道の駅わきの里」として利用されているリフレッシュセンターとわきの里（1986 年建設）（98

年建設）を 2025 年度末で廃止するとし、脇野沢斎場（1991 年建設）も「廃止の方向」と打ち出した。一方、脇野沢港そばにある脇野沢流通センター（88 年建設）については建て替えて 2028 年度オープンを目指すとした。市はこうした再編案を 5 月に住民側に示し、7 月 24 日には脇野沢地域交流センターでワークショップを開いた。住民約 35 人に齋藤彦副市長は「今後の持続的な地域づくりを検討するに当たり、より多くのニーズやアイデアを取り入れながら進めていく」と説明。住民は 6 グループに分かれ、新たな流通センターに求める機能や「あすましく暮らし続けるためのアイデア」など 3 テーマについて意見を出し合った。

脇野沢に暮らし続けるために必要なものは、ATM、ガソリンスタンド、各地区を結ぶシャトルバスといった設備・サービスから、「診療所」「高齢者が稼げる場」まで生活に即した意見が多くを占めた。ただ合併後、脇野沢地区からはイノシシ肉生産、海づり公園、青森と結ぶ旅客船などさまざまな事業・施設が姿を消し、23 年 3 月には流通センター隣のマリンハウス脇野沢（1993 年建設）も廃止になった。明るい展望は抱きにくく、ワークショップでも「諦めている」と口にする住民がいた。取材に対し「みんな廃止になって、働く場も少なくなっていく。小さい地域が損をするのが合併だ」と憤りを交えて話す住民もいる。

7 月のワークショップでも検討状況を報告。住民からも観光・シティプロモーション課によると、26 年度以降も運航する場合は救命いかだや位置発信装置などを積載するために大規模修繕が必要になるという。1989（平成元）年に就航した船の老朽化に加え、スタッフの確保、赤字が続いているなどの課題があることも勘案した。



むつ市 住民意見踏まえビジョン

むつ市は本年度、急速に人口が減少している脇野沢地区を対象に、公共施設の再編を進めている。既存施設の廃止案とリニューアル案を既に住民へ提示。ワークショップを通じて住民から出た意見を反映させながら、持続可能なビジョンの策定を目指す。市は、市全体の公共施設の適正配置を目指しており、来年度以降は他地区でも同様の検討を順次進めていく方針。（熊谷慎吉）

↑ ↓ 8/11 東奥日報

観光遊覧船廃止も

夢の平成号、来年度末で

むつ市脇野沢港を発着する観光遊覧船「夢の平成号」（定員 79 人）＝写真＝を運航している市は、2025 年度末で遊覧船事業を終える方向で検討している。北海道・知床半島沖での観光船沈没事故を踏まえ、今後新たな安全対策が求められることなどを考慮した。市観光・シティプロモーション課によると、26 年度以降も運航する場合は救命いかだや位置発信装置などを積載するために大規模修繕が必要になるという。1989（平成元）年に就航した船の老朽化に加え、スタッフの確保、赤字が続いているなどの課題があることも勘案した。

市観光・シティプロモーション課によると、26 年度以降も運航する場合は救命いかだや位置発信装置などを積載するために大規模修繕が必要になるという。1989（平成元）年に就航した船の老朽化に加え、スタッフの確保、赤字が続いているなどの課題があることも勘案した。



総事業費88億円増、350億円

むつ総合病院 完成は29年度末に

むつ総合病院の新病棟整備で、一部事務組合下北医療センター管理者の山本知也むつ市長は8日、総事業費が約350億円となり、2023年6月の積算時より約88億円増加したと明らかにした。23年8月に公告した入札が不調に終わり、建設資材の高騰や労務費の上昇などを踏まえた事業費を再積算した。27年4月の供用開始もずれ込み、新病棟の完成は遅くとも29年度末とし、供用開始はそれ以降となる見通し。

市役所で開いた同センター議会臨時会で報告した。

224億円だった建設工事費は321億円に増加。内訳は、Ⅰ期工事（新病棟建設）265億円、Ⅱ期工事（既存棟改修）24億円、Ⅲ期工事（病棟解体、外構）21億円など。

前回の入札は、新病棟建設と既存棟改修を合わせてⅠ期工事としていたが、入札不調を受けて分割。29年度末までの間で工事の着工と完成日を任意で設定できる「余裕期間制度」を採用するほか、作業員確保のための宿泊費を支援し、施工体制確保に配慮した入札スキームを整えた。

（佐藤航）

定数削減含め 方向性を検討

むつ市議会が会議設置むつ市議会は、次期市議選に向けて議員定数の方向性を検討する会議を設置し9日、市議会大会議室で初会合を開いた。

市議会ではこれまで、会派代表者会議で議員定数について議論してきた。削減を推す声が多かったものの意見が一致しなかったため、検討会議の設置を決めた。

全4会派から2人ずつの8人で構成し、無会派の5人はオブザーバーとして参加。9日の会合では、座長に佐々木隆徳議員（陸奥末来）を選出した。次回以降、削減を含めて定数の方向性を協議。意見がまとまり次第、全議員が参加する議員協議会を開き、検討会議の内容を踏まえて議論する。

佐々木座長は取材に「議員協議会での議論に向け、さまざまな意見を出してもいい方向性を確認していきたい」と語った。

（山内はるみ）

↑8/10 東奥日報

↓7/27 デーリー東北

↑8/9 デーリー東北

むつ・光のアゲハ 世界夜景遺産

国内初、タイで認定式

「光のアゲハチヨウ」の愛称で知られる、むつ市の釜臥山展望台から市街地を望む夜景が、一般社団法人夜景観光コンベンション・ビューロー（埼玉）の「世界夜景遺産」に、日本で初めて認定された。26日、タイのバンコクで開かれた「夜景サミット」で認定式が行われ、出席した山本知也市長は「これからも価値を高め、グローバルナイトツーリズムにつなげていきたい」と話した。

（佐藤航）

釜臥山展望台、市民ら祝福

市の夜景は、海沿いを伸やアダベスト、アユタヤなびる市街地の明かりが、夜どが認定を受けており、今空を羽ばたくアゲハチヨウのように見えるのが特徴。

2004年には「日本夜景遺産」に選ばれている。

21年に創設された世界夜景遺産は、10項目のうち3項目を満たすことが認定の条件。これまでに、モナコ「オリジナリティに溢れた



国内初の世界夜景遺産に認定されたむつ市の夜景（市提供）

編集後記

とうとう、中間貯蔵施設稼働が現実のこととなりつつあります。今月下旬にも検査用キャスク1基が柏崎羽根原発4号機から搬入見込みです。容認派が圧倒的多数の市議会ではなすべがありません。今後の運動の方向は新しい局面を考えなければなりません。生きていようはずのない50年先のことで問題提起し続けるむなしさを感じる日々ですが、もう少しだけこの問題を訴え続けることに了解願います。自民党の顔が27日に変わります。候補者の一人の河野氏は核燃サイクルに否定的です。ましてや10,11月には総選挙が予想されます。政権が代われば核燃サイクル問題は明らかに大きな転換があるでしょう。そのことを願いつつ、今しばらくお付き合い下さい。



くす玉を割って認定を祝う来場者ら（26日、むつ市）

特徴「優れた夜景観賞環境」の要件を満たした。認定を受け、26日に釜臥山展望台で結果発表会を実施。中継でつないだ山本市長から報告を受け、訪れた子どもらがくす玉を割るなどして認定を祝福。公式PRソング「ヒカリノアゲハ」も披露された。



今回及び次回は大邑登喜夫氏（むつ市在住：元教師）の『野平物語』（1999年刊）から収録しました

野平と川内を結ぶ交通機関として森林軌道がある。これは野平の山々で伐採した木材を野平から川内営林署の貯木場まで運ぶ軌道（トロッコ）である。十数両の木材運搬車と最後部に客車が1両連結されていた。



今では野平までは立派な道路があるが、そのころは自動車を通れる道はなかった。森林軌道は、川内貯木場から川内川の西側を平野の北に向かって小倉平の山裾を真っすぐ通って下小倉平を過ぎ、安部城鉱山のあった安部城に入って道路と併行して走り、畑部落までそのままいき、畑からは川内川の左川岸に沿って一路野平の終点まで一気に上って行くのであった。

トロッコは、貯木場から上小倉平までは稲穂が揺れる水田地帯を、いかにも苦しそうに喘ぐようにキーキーと音をたてながら進んで行く。その後は山の裾を巻きながらゆっくり走って行き、下小倉平を過ぎて川内川を渡り安部城へ出て行く。この辺りの川内川は川幅も広く、川の流れもゆったりしていて春や夏のころは岸のネコヤナギやイヌコリヤナギの白い花穂が風に吹かれて飛んでいるのがよく見られたものだった。六月から八月頃には、ウグイス、ビンズイ、ウソ、コマドリ、エゾムシクイなどの歌声が賑やかだ。川は曲がりくねっており、秋の集中豪雨時などではいつも洪水になり、暴れ川として知られ、架かっている橋がよく流されたものだ。流域の水田や畑が冠

水して、被害が大きく農民たちの頭痛の種ともなっていた。この辺の葦の原っぱの池塘の低木からは、モズがしきりに啼き立てていた。岸边には魚影も多く、ヤマメやイワナなどを狙って、釣り人の姿もよく見られたものだった。川内川は、下北半島西部山地の崑倉山西方の縫道石山付近に源を発する。そして親不知溪流を東流し、深い先行谷を形成しながら、畑で南流してくる支流の湯の川と合流して流路を変更し、更に南流して大滝を経て河口部で川内町を貫流し、陸奥湾に注ぐ。流路約30キロメートル、流域面積203平方キロメートルの、下北では最も大きい二級河川である。支流の湯の川沿いには温泉が沸き、野平、畑、及び畑から河口部にかけて、段丘や谷底平野が形成されている。

川内川流域にある安部城鉱山は、下北郡川内町安部城にあり、1910年（明治39年）田中銀之助によって開発された。その後、1910年田中鉱業が北海道国富鉱山の精錬溶剤として硫化鉄鉱を採掘するため鉱区を取得し探鉱した結果、有望な鉱床を発見、1913年から精錬を始めた。1914年頃には安部城鉱山の西方に位置する西又鉱山との間に索道を完成し、西又鉱山とこれに隣接する岩滝鉱山の鉱石も精錬した。

特に安部城鉱山の桜鉱床開部当時の最盛期には従業員約1,000人を擁し、一日約500トンの銅、鉛、亜鉛を産出した。大正末期には鉱量が枯渇し、1939年（昭和14年）三月、住友鉱業が買収し探鉱したが大きな成果は見られなかった。その後、安部城鉱山の手に移り、硫化鉄鉱を採掘したが、鉱量の枯渇で1953年（昭和28年）休山した。1912年から12カ年にわたり、大規模な精錬の際、盛烈な毒煙を排出、西風、東南の風によって川内川流域全体を覆

い、特に精錬所を中心として長円形状の広大な面積が煙害にかかり、ひば林は木立のまま枯死、広葉樹も枯れ落ち、畑の豆類も葉の落下が見られた。付近の村民は不安を抱き、集会を持つに至り、1914年11月に県議会でも取り上げられた。同年12月、鉱山側と村民が話し合いの結果、鉱山から1914年分として8,000円を交付、見舞金として1,500円を村落に交付することなどの決定をみている。1915年2月18日、泉竜寺で煙害対策保全大会が開かれている。これが安部城煙害事件である。この説明のように、ここで働く人も多く活気を呈していたときもあったと聞く。今もってその頃の残滓が高く積みかさねられ放置されている。あっちこっちに、昔繁栄していた頃の面影が残っている。しばらく行くと大滝水力発電所があり下



北では唯一の発電所である。

この辺りから川の両岸の様子が変わってくる。イヌコリヤナギやネコヤナギが多かっただけの岸の樹木が、モミジやイタヤカエデ、コナラやミズナラなども混じり山が川に急に迫る。春には、両岸の茂みの木々の間からは、時折ウグイスなどが沢を渡るさえずり声が「ホウケッキョウ、ケキョ、ケキョ」と聞こえて来る。さらに進むと岸は堅い岩質の岩が主流をなし、美しい渓谷美となっていく。道路が大きく右に曲がって進むと川内大滝が左手に見える。春には

作者の大邑氏は長年にわたり、教職の傍らで下北半島の原子力基地化に先頭に立って闘いました。また、「映画監督川島雄三を偲ぶ会」事務局長などを歴任、様々な文化活動、社会活動に尽力されました。